

今号のトピックス 第10回子どもとメディア全国フォーラム 特集

1月26日(日)東京都・日本医師会館において、第10回子どもとメディア全国フォーラム「スマホ社会と子どもの未来～技術革新は人類を幸せにするのか?～」が開催されました。定員500名の会場が満員、すでに12月末に予約をお断りという盛況ぶりでした。今号では午前部と午後部に分けて、報告いたします。

午前の部

午前中は、基本講演が2本。本会顧問の東北大学川島教授と同じく顧問樋口進久里浜医療センター院長でした。紙幅の関係で川島教授の講演内容のみ紹介します。

氏は、仙台市立小・中・高に通っている約7万人超の児童・生徒全員の各教科の学力調査と生活習慣アンケートを、8年間の連結可能匿名化手法による調査結果を中心に講演されました。

この調査で、スマホ使用時間が平日で1時間を超える児童・生徒では、学力が使用時間と相関して低下すること、追跡調査(縦断調査)により学力の低下の原因がスマホ使用であると強調していました。

仙台市のHP記載の「スマホ使用時間、家庭学習時間、睡眠時間と学力」についての調査結果では、同じ睡眠7～8時間、学習時間3時間以上でもスマホ使用時間で成績に大きな差が生じていることがわかります。

さらにスマホ使用による学力低下の原因を調べるため、健康な児童・生徒224名の3年間の脳発達のMRI調査を実施、スマホ等の使用頻度が高い子どもの大脳皮質、および白質の広範な領域に発達遅延が生じている、即ち「スマホ等の長時間使用が子どもの脳発達を阻害する」と発表しています。教授は、格差社会の到来を危惧していました。

注視すべきは、この重大な調査結果のプレスリリース前(2018年7月・東北大学)に、某機関から「発表を止めてほしい」という圧力があつたことです。私たちもこの事実を初めて聞きました。驚くべきことです。(原口剛、大谷良光)

NPO 法人子どもとメディアでは、本フォーラムの報告集を毎回発行しています。参加できなかった方、もう一度確認されたい方は、法人に問い合わせてください。

午後部

午後部最初の特別講演は、生命誌研究者の中村桂子氏。

氏は、地球上の生きものは(バクテリアから動植物、人間に至るまで)全て38億年という時間をかけて今ここに生きている、同じ地球の上でともに生活をしている自然の一部であり“生きもの”である。このメッセージは、万物の霊長などと思いがっている人類をいさめ、環境問題を真摯に受け止めなくては、と私には聞こえました。

また、スマホばかり見ているのは、人類が進化する過程でせっかく獲得した言葉や想像力(=創造力)、分かち合う力、世代を超えた助け合いの力などが育たなくなってくるのではないかとこの考えに共感しました。

スマホの中の知識は誰かが調べたもので、世界のほんの一部のものに過ぎない。昆虫の種類も宇宙のことも、いまだに90%以上が未知のものであるということに気づいてほしい、世界はまだまだ驚きとワクワクにあふれているのだと言われていました。静かに淡々と話される、その言葉の重みに感銘しました。

その後のシンポジウムでは、まず、日体大の野井真吾氏から、子どもの“からだと心”のいまとして「子どものからだと心白書2019」をもとに様々な報告がありました。特に睡眠の問題がある子どもたちにキャンプでアウトメディア生活をするのが有効だと、メラトニンの分泌調査の結果とともに報告されたのが印象的でした。

次に、眼科医の富田香氏からは、子どもたちの目を守る～スマホではなく外遊びを～と題して、日頃の診療で感じたこととお話がありました。

子どもの発達(生まれてすぐから)にそって外遊びをすることで眼も発達していく、その時期にスクリーンタイムが長いと様々な弊害がある。外遊びの大切さを何度も強調されていました。

その後の討論会では“大人は何をしていけばいいのか?どんな社会を目指せばいいのか?”などのテーマで意見を交換。本会筆頭顧問の道永真理氏は、予防教育を勧めることなど医師会からの働きかけについて。また、富田氏は視力の悪い子を減らすこと、野井氏は子ども時代と発達には隙間にできたぐうたらする時間が必要と強調されました。中村氏は子どもたちの声をきちんと聴く事が大切、とまとめられました。中村氏はタワマンの問題も心配されていました。

最後に清川氏が、この場だけに終わらせず、拡げてもらうことが大切。また、これからの10年、大人の行動が問われる。子どものSOSをしっかり受け止め、それぞれの立場で、地域で、できることをしていきましょうと述べられました。(伊藤理恵)